

日本国際理解教育学会会報

JAPAN ASSOCIATION FOR INTERNATIONAL EDUCATION NEWSLETTER

Vol. 13 平成10年度 No. 1 平成10年7月21日 編集発行：日本国際理解教育学会事務局
〒161-8539 東京都新宿区中落合4-31-1 目白学園女子短期大学内 TEL & FAX：03-5983-8132

■目次■

平成10年度新役員
国際理解教育学会第8回大会報告
理事会報告
平成10年度総会報告
平成9年度決算報告と平成10年度事業案および予算案
寄贈文献・図書
お知らせ
事務局移転と会費納入のお願い

平成10年度新役員

平成9年度に行われた選挙結果により、平成10年4月から13年3月までの学会の新役員が次のように決まった。

会 長	天城勲 (高等教育研究所)
副会長	川端末人 (神戸大学)、中西晃 (目白学園女子短期大学)
常任理事	天野正治 (筑波大学)、新井郁男 (上越教育大学)、安藤益代 (日本国際交流振興会)、宇土寛泰 (東京都大田区立蒲田小学校)、島久代 (千葉大学)、多田孝志 (目白学園中・高等学校)、千葉果弘 (国際基督教大学)、樋口信也 (帝京大学)、米田伸次 (帝塚山学院大学)、渡部淳 (国際基督教大学高等学校)、星村平和 (帝京大学)
理 事	大津和子 (北海道教育大学)、岡田真樹子 (国際基督教大学高等学校)、河内徳子 (大東文化大学)、佐藤郡衛 (東京学芸大学)、田淵五十生 (奈良教育大学)、永井滋郎 (元広島大学)、中島章夫 (国際教育交流馬場財団)、中村幸士郎 (山口大学)、二宮皓 (広島大学)、光田明正 (桜美林大学)、嶺井明子 (筑波大学)
監 事	桑ヶ谷森男 (国際基督教大学高等学校)、藤沢皖 (外務省)

なお、中村幸士郎、二宮皓、光田明正、嶺井明子の四氏は、規約第6条(3)項による会長推薦理事である。

また、会務を遂行するために次の委員会を設け運営することになった。

委員会名	委員長	委 員
紀要編集委員会	渡部淳	樋口信也、嶺井明子、宇土寛泰、森茂岳雄
研究委員会	新井郁男	宇土寛泰、島久代、佐藤郡衛、田淵五十生
実践研究委員会	多田孝志	米田伸次、星村平和
国際委員会	千葉果弘	天野正治、安藤益代、中島章夫
ビジョン検討委員会	川端末人	中島章夫、米田伸次、渡部淳、多田孝志

各委員会にはそれぞれ、これ以外の会員も幹事として参加を求めることもできる。

◆役員よりの挨拶◆

〈グローバルズムと国家〉 会長 天城 勲

20世紀最後のこの10年間は、日本にとってもまた世界的にみても極めて重大な歴史的変動の時期ですが、しかも21世紀への新しい期待を抱きながらも行き先不透明なむずかしい時代です。国際理解教育の立場からはどうしても世界的視点が欠かせません。近年は政治、経済、文化等の諸領域においてグローバル化が顕著になり且つ時代のキー・コンセプトになっています。現在世界に存在する約200の独立国家を横断して地球の規模、全人類の観点で解決に挑戦しなければならない課題の認識が強まっています。結構なことですが、地球や人類を視点においた考え方の対局にあるのが国民国家(nation state)的ないしは国益的な考え方でしょう。

Nationは国民とも民族とも訳されます。従ってnation stateとは単に政治的な枠組みではなく、実体としてはむしろ民族(国民)です。民族の定義は難しいが「特定の固有文化とそれへの帰属意識を共有する集団」と一応理解します。それにも増して文化の定義は難しい。「一定の生活様式と言葉と思考様式をトータルにとらえたもの」が前述の「特定の固有文化」と私なりに一応理解して

す。一寸粗雑な解釈で異論が多いことは十分わかりますが、ここで一応の定義めいた理解をまとめないと論議が進みませんから。ナショナル/カルチュラル・アイデンティティが主張されるのは民族・言葉・文化を通じる一定の価値の存在意義の自己主張であり、ナショナリズムの本質でもあります。これは別に悪いことではありません。

日本で最近、教育の国際化が云われ、自覚と責任をもった日本人、世界に貢献出来る日本人の育成などが主張されるのは矢張り国民国家日本の発想でしょうし、ユネスコの発想ではありません。かつてユネスコの唱導する協同学校計画に参加していたのが、文部省の指導の下で帰国子女教育に転換していった歴史があります。共に国際理解教育を目指していたのです。

地球とはもとは地学や天文学の言葉であったのが、今日では多くの国や人の生活まで巻き込んだ運命共同体的な存在になりました。グローバルとはその象徴的表現だと思います。しかしその実体は国民国家の相互関係です。Think globally, act locally が求められています。従来、国際理解教育において国民国家については余り掘り下げて論議されてこなかったと思います。日本にとっては大きな課題ではないでしょうか。

<学会の充実、発展のために考えること> 副会長 川端 末人 (研究担当)

私たちの学会は1991年に創設されて今年は8年目に入り、学会員の総意に基づく理事選挙も行われて新しい学会運営の体制は始動しようとしている。そこでこの際、学会のこれまでの歩みを顧みて、そこから一層の学会としての充実と発展を考えてみたい。

私たちの学会は、国際教育の実践と研究にたずさわる者が、国際社会の構造の規定条件を正しく認識し、新世界秩序の創造という課題をもって生きる日本の児童生徒とともに、日本人であると同時に地球社会の一員に適わしい意識を啓培し、それに必要な知能、態度、資質をもつ人間形成の営為の在り方を探求することを目的としていると、私は考えている。それは類似の研究的組織にはない私たちの学会のレーゾン・デートルであるといえよう。

しかしながら、学会の抱える研究課題は実に広範かつ多岐多様である。全人類の殺戮を脅かす核の脅威、経済・金融の相互依存関係の深化、地球的規模での情報通信の飛躍的發展、民族紛争、環境破壊、飢餓、貧困、ジェンダー等、いずれも人間の尊厳に対する挑戦的課題だといって過言ではない。

これまでを振り返ってみると、学会としての研究と銘打たれた「国際理解教育の理論的、実践的指針の構築に関する研究」は、分割されたテーマの分担者の協議にとどまり、結局において報告書作成という拙速主義に陥り、稚拙な成果にとどまった。その結果「我が国の国際理解教育を促進し、その発展に寄与する」(「学会規約」)本学会が発揮しなければならない知的指導力と責務をも担うものとならなかったように思われる。

また、学会における理論と実践との統合ということは、研修会や研究大会の在り方をめぐってしばしば論議されてきたが、議論の背後にあるものが教育現場でのデータに対する実証的思考に欠けた、プラグマティックな理論であったり、または理論再構築といわれても、実践に必要な教材開発や学習法と明らかに径庭があったり、ほとんど視野にいれるものが少いだけに、教育実践者にとって何よりも大切な学級における子どもの学習の活動が生き生きと浮び上がってこなかった。

私たちの学会は今後、何よりもこの学会が真に探究しなければならない国際教育の基礎研究とは何かを明確にしなければならないと考える。そのためにはこれまでのような安易な拙速主義やプラグマチズムを絶ち切り、学会員の創意を結集して着実な実践研究の実証的、有機的な統合を図ることが必要である。このことは、私たちの学会の充実と発展をもたらす、そのことがやがてわが国の国際理解教育への知的指導力の発揮となると考えるものである。叙上の考えに対する忌憚のない批判、意見を寄せ頂ければ幸いである。

<学会の更なる発展を期して> 副会長 中西 晃 (事務局担当)

この度の役員選挙で再び理事に選出され、理事会及び平成10年度の年次総会で副会長に任命されました。不祥の身ですが選ばれました以上は学会の発展のために全力を尽くす所存でございますので、会員の皆様のご協力をご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

ご承知のように本学会は、平成3年1月26日に設立されて以来7年半を迎えております。設立の趣旨の一文に「人々の心に国際教育の重要性を訴えなければならない」とし「研究者、教育実践者、その他の関係者を糾合して、日本国際理解教育学会を発足させ、教育の研究の実践、諸国民との交流を通じて、我が国の国際教育の促進、発展に寄与する」と述べてあります。当時と比べ我が国の国際化は一層進捗し、21世紀を迎えるにふさわしい人材の育成は急務となっております。中教審や教課審の答申もたされ、国際理解教育の重要性はますます大きくなってきています。このような時代の要請にこたえるべきわが学会の責務は重大であることを再認識し、設立の趣旨に述べられているように、研究と実践の積み重ねを会員諸氏とともに進めていく覚悟でおります。

幸い新役員会の理事会で発議し、総会で承認された本年度の事業に、紀要の充実、3本の柱を立てての研究の発展促進、実践研究会の全国的な展開、アジア太平洋地域の国際会議の開催、学会の将来構想に関する検討会など従来とは異なった意欲的な構図ができています。このような新企画の実践と充実を目指して、皆様とともに学会を一層発展させるように努力したいと念じております。

本年より私の勤務している目白学園女子短期大学に学会の事務局を設置することになり、事務局を担当する副会長に任じられましたが、その責任の重大性を実感しているこのごろでございます。事務局運営のいかんによって学会の発展も左右されることと思います。しかし、これには会員の皆様のご協力なくしては達成できません。この意味においても是非ともご意見を頂きながら改善し、運営していきたいと考えておりますのでよろしくお願い申し上げます。

＜紀要編集委員会の活動＞ 紀要編集委員長 渡部 淳

紀要は“学会の顔”であると言われるかもしれませんが、柿沼前編集委員長のもとで、その輪郭線はほぼ固まったのではないかと考えます。この誌面を借りて、前編集委員会の方々のご努力に御礼を申し上げます。従って、第5号から第7号を担当する新しい編集委員会の作業は、これまでのスタンスを基本的に踏襲していくことになります。

幸いなことに、第4号にいたって会員の応募原稿の本数が大幅増加を見ました。これは大変喜ばしいことです。編集委員会としては、この流れに沿って、査読作業をより正確・公正に行えるよう編集体制をさらに整備すること、ベテラン会員によるアドバイスのもとで公募原稿中のリライト原稿の本数を増やすこと、ひいては応募論文からの掲載本数をできるだけ増加させる方向を模索すること、などを考えています。

また、学会誌としてのレベルを維持しながらも、掲載記事を多様化するなどの方法で、より親しみのもてる誌面作りを、とも考えております。多くの会員の皆様の、意欲的な投稿とご協力をどうぞ宜しくお願い致します。

＜研究委員会の活動＞ 研究委員会副委員長 宇土 泰寛

研究委員会では、21世紀に向けた新たな教育実践を目指し、国際理解教育学会としての研究をどう進めていくべきかという問題意識のもと、次のような課題を設定し、研究を進めていきたいと考えています。

- ① 科研「国際理解教育の理論的実践的指針の構築に関する総合的研究」(H7年度～H9年度)を受け継ぎ、今後の方向性を更に検討していく。
- ② 教育状況や学会の動向を踏まえ、国際理解教育の本質や先駆的研究や意義ある研究等のテーマについて特定課題のプロジェクトチームを設け、定期的・継続的に研究を進め学会活動に反映していく。(年次大会、実践研究会や研究紀要など)
- ③ 国際理解教育等の実践の動向を教育実践報告集等の収集や実践報告によってつかみ、分析・考察し、これからの国際理解教育の在り方を探る。

これらの課題を達成するために、地域的つながりやコンピューター通信による学会員の協働的実践研究ネットワーク化を図り次のように委員会組織を構成したいと思います。

研究委員会は、委員会運営や3つの研究課題を担う「幹事」、国際理解教育の動向調査分析と実践研究を協働的に進める「研究員」、コンピューターネットワーク化と運営を行う「情報ネットワーク推進委員」によって構成し、研究を進めます。

そこで、「研究員」として協力できる方を募集します。下記まで、ご連絡下さい。

研究委員会副委員長 宇土 泰寛

〒251-0015 神奈川県藤沢市川名 661-5

TEL&FAX 0466-23-5437

＜実践研究委員会の活動＞ 実践研究委員長 多田 孝志

上越教育大学での第8回大会から実践研究委員会が正式に発足した。

実践研究委員会は、地域で開催される研究会であり、実際の授業や実践事例等をベースに各地域で理論研究者や実践研究者などさまざまな立場の方々が集い研究をすすめる、国際理解教育に関わる、学習目標、学習方法、教材開発、教育評価等について明らかにしていくことを目指している。実践研究会が全国の地域で開催されることにより、多くの会員に国際理解教育の実践展開上の疑問や課題を協議する機会や教職研修の場を提供できると考えている。

①委員会の構成

実践研究委員会は、担当常任理事3名 多田孝志(目白学園高校)、米田伸次(帝塚山学院大学)、星村平和(帝京大学)および全国各地の委員数名により構成する。

具体的事業展開

- ・年1～2回の地域での実践研究会の開催をめざす。
- ・本学会の会員はもとより、優れた識見をもつ他分野の研究者や実践者などとも提携し開かれた実践研究会を推進していく。
- ・各地域の関連諸機関、諸団体と連携を図り、協力して質の高い実践研究会を開催していく。また逐次全国各地での地域実践研究会の設立をめざす。
- ・担当常任理事および委員が地域との連絡・調整にあたる。
- ・研究会で明らかになった、成果、実践推進上の問題点や課題については会報や紀要等を通じて会員に知らせる。

なお本年度は11月に島根県で実践研究会を開催する予定である。今後全国各地で実践研究会開催の計画がなされていくことを期待しています。

＜国際委員会の活動＞ 国際委員会委員長 千葉 泉弘

国際委員会の目的は、日本国際理解教育学会を世界に開かれた学会にすることです。日本で行われている国際理解教育の様々な活動を海外に紹介したり、海外の事情、特にアブニウヴ等のアジアの国際理解教育の動向を紀要等を通して会員に知らせたり、スタディーツアーによる海外研修を行います。これまでヨーロッパとタイのスタディーツアーを実施しました。1998年度は、東アジア、東

南アジアの専門家を招いて国際会議を開催する予定です。金融危機、インドネシアの政権交代、インドやパキスタンの核実験等、アジアは大きく揺れ動いており、国際理解教育の前途に重大な影響を与えるものと思われます。東南アジア諸国の事情について理解を深め、日本と東南アジア諸国の研究者や実践者の密接な協力体制を構築する計画です。

国際理解教育学会第8回大会報告

第8回大会委員長 新井 郁男

第8回大会は6月13日(土)～14日(日)に上越教育大学を会場にして開催されました。上越教育大学では、社会系教育研究系の二谷貞夫、山本友和、田部俊充の3教官、学校教育研究系の若井弥一、大前敦巳、新井郁男の3教官に各系の大学院生数名を加えて準備委員会を構成し、準備・実行にあたりました。

会場校として企画すべき最大の焦点はシンポジウムのテーマ、発表者等をどうするかということでしたが、北陸という地域の特性、準備委員会の社会系教官の専門、上越教育大学附属中学校でのこれまでの取り組みなどを考慮して、歴史認識という観点から考えようということになり、テーマは「日韓交流を通じてみた国際理解教育の課題と展望」と決まりました。また、パネリストには、日韓交流に関しての研究・実践をしている二谷貞夫氏(上越教育大学)と田淵五十生氏(奈良教育大学)、附属中学校在職時に日韓交流推進について中心的役割を果たした秋山正道氏(新潟県青柳町立田沢小学校)に神戸韓国総合学院の田端潤氏の4人に、また、司会には日本史教育が専門の山本友和氏(上越教育大学)をお願いすることができ、大会最後のセッションとして充実した討議が行われました。

また、第7回大会で初めて設置された課題別討論会については、第8回大会では、多田孝志、渡部淳、新井郁男の3人で企画することになりましたが、昨年の大会に準じた形式で実施しました。それから今回は、学会のメンバーが中心となって推進した「国際理解教育の理論的、実践的指針の構築」をテーマとする科学研究費による研究の報告書がまとまったので、それについての発表を行う特別部会を設置しました。

自由研究発表の方は、15件の申し込みがあり、三つのセッションを設けました。

大会を引き受けた当事者としては、参加者がどのくらいあるかが心配でしたが、最終的には当日会員も含めて百人近い参加が得られました。

大学内の学生会館で行った懇親会については、若井先生の特別ルートで確保した新潟の各種銘酒のコーナーを設け、また、加藤章学長にも参加していただき、予想を上回る参加者で会員相互の交流を深めることができたのではないかと思います。次回の大会校を代表して星村平和先生から来年度の抱負も語られ、首尾よくバトンタッチができました。アフター・パーティーは、それぞれ上越の魚と酒で楽しい夜を過ごされたのでは？

最後に、シンポジウム、課題研究、特別部会、自由研究発表それぞれにおいて、ご提案、ご発表、とりまとめいただいた皆様、それにそれを盛り上げていただいた参加者全員に厚く御礼申し上げます。また、準備委員長として、準備・実行などに鋭意あたってくださいました準備委員会のメンバーにも感謝申し上げます次第です。

◆第8回大会プログラム

《第1日目 6月13日(土) 午後の部》

自由研究発表Ⅰ 司会：市川博美(信州大学大学院)、佐藤郡衛(東京学芸大学)

- ①国際理解教育の人的要素—文章表現を題材にして— 千葉充(東京都立明正高等学校)
- ②国際理解教育におけるセルフ・エスティームの考察—その本来的意義・可能性・危険性について— 野崎志帆(大阪大学大学院人間科学研究科)
- ③学校経営における人権教育の視点—国際理解教育と同和教育の接点を模索した実践から— 稲垣有一(大阪市立市岡小学校)
- ④—地方都市の国際化と住民の意識—中学校保護者の意識調査を中心に— 嘉陽正倫(山口県宇部市立厚南中学校)
- ⑤インターパーソナル・コミュニケーションの教育的意義に関する研究 川端未人(神戸大学)

自由研究発表Ⅱ 司会：野田一郎(元学芸大学)、星村平和(帝京大学)

- ①小さな知の冒険：創発性を基盤としたカリキュラムの開発—小さなボランティア活動を通じた国際理解— 後藤泰博(鳴門教育大学大学院)
- ②国際理解教育を通じた豊かな人間性の育成のあり方—中学校社会科地理的分野(EU)を対象に— 辻井清吾(トリヴァン大学)
- ③日本の国際理解教育の目標設定における「国」の概念の分析—国際理解教育のカリキュラム開発の立場から— 佐々木文(広島大学大学院国際協力研究科)
- ④台湾における国際理解教育の現状—環境教育政策を中心とした考察— 萩原豪(学習院大学大学院政治学研究科)
- ⑤国際理解教育カリキュラム開発に関する—考察—米国社会科を手がかりとして— 森田真樹(広島大学大学院国際協力研究科)

自由研究発表Ⅲ 司会：島久代(千葉大学)、米田伸次(帝塚山学院大学)

- ①英語授業の中で取り組む国際理解教育の実践—日本の祭り与中国「春節」の祭礼を通しての国際理解教育— 大西理子(三重県伊勢市立厚生中学校)
- ②地域と学校で模索する国際理解教育—春日部市国際友好協会の試み— 大島薫(埼玉県春日部市立立里中学校)
- ③異文化理解に向けた「写真を読む」学習題材の制作と活用の試み 大隅紀和(京都教育大学)、大隅拓哉(京都府立八幡高校)
- ④ロックで学ぶ国際理解 寺島美紀子(朝日大学経営学部)
- ⑤大学における国際理解教育の探求—Chaplin, "THE GREAT DICTATOR"を教材として— 寺島隆吉(岐阜大学教育学部)

- ①ユネスコにおける国際理解教育の変遷 千葉卓弘（国際基督教大学）
- ②ユネスコ協同学校の変遷 嶺井明子（筑波大学）
- ③日本の国際理解教育論の推移 松居美帆（元東京学芸大学大学院）
- ④日本の学校における国際理解教育実践の推移 宇土寛泰（大田区立蒲田小学校）

《第2日目 6月14日（日）午前部》 課題別討論会

第1課題「国際理解教育の学習方法をどうするか」 司会：渡部淳（国際基督教大学高等学校）

話題提供者：池田巨宏（千葉教育センター）、瀬戸健（富山県高岡市教育委員会）

第2課題「国際理解教育の教材開発をどうするか」 司会：島久代（千葉大学）

話題提供者：山口修司（島根県八雲村立八雲小学校）、今田晃一（大阪教育大学池田中学校）

第3課題「国際理解教育の評価方法をどうするか」 司会：多田孝志（目白学園高等学校）

話題提供者：中山博夫（名古屋市長猪子石小学校）、古川治（大阪府箕面市教育センター）

課題別討論会報告会 司会：多田孝志（目白学園高等学校）

《第2日目 6月14日（日）午後部》

公開シンポジウム「日韓交流を通じてみた国際理解教育の課題と展望」 司会：山本友和（上越教育大学）

パネリスト：秋山正道（新潟県青柳町立田沢小学校）、田淵五生（奈良教育大学）、田鍋潤（神戸韓国総合教育院）、二谷貞夫（上越教育大学）

◆第8回大会に参加して

◇伊井直比呂（大阪教育大学附属高等学校池田校舎）

上越教育大学で行われた第8回国際理解教育学会に参加させていただきありがとうございました。本学会の果たす役割が毎年重要になるにつれ、それにつられるように私の職場からも参加する同僚がずいぶん増えました。と言っても私を含めて4名なのですが、大阪から新潟を経由して飛行機とレンタカーで上越市へアプローチし、途中、雪の重みを減らすための縦形信号機に冬の過酷さを思い浮かべたり、米どころ新潟の風景を鑑賞しながらの楽しい行程となりました。

さて、学会は年々盛会になり、質的にも着実に既存の研究会とは違うものに発展してきていることを今回は強く感じました。多くの充実した発表・問題提起を聞かせていただき今年も驚きを持って参加させていただいた次第です。とりわけ今年の発表内容がこれまでの国際理解・国際教育の内容的枠組みを探るバリエーションに溢れる発表から、①国際教育の基礎的概念と理論に資するもの、②カリキュラム開発に関するもの、③実践に関するもの、④これまでの国際教育の流れと今後を示唆するもの、などに大きく分類され（勝手に私がそう思ったのですが…）、系統的に位置づけられた内容の発表が多かったようです。それゆえ、緊張感があふれる各発表会場を網羅的にきかせていただこうと欲張ってしまい、皆様には大変ご迷惑をおかけしたのではないかと考えています。

もう一つ、私が持った大きな印象は、教育現場の様々な具体的な実践の広がりとともに、国際教育を構成する要素としての既存概念の検証と、今後押さえるべき概念・理論の考察を行った発表が多くあったことでした。大学院生を中心におこなわれたこれらの研究が、教育現場での今後の実践をより足腰の強いものに仕上げることになるものと予感すると同時に、実践を裏打ちする新たな研究の必要性について示唆を得た次第です。ありがとうございました。

ところで、さらに報告したいことがあります。私たちは高田駅近くに宿泊したのですが、とにかく昔ながらの町並みが暖かく残っていることに感激してしまいました。夜の仲町通りを歩いてみると、大阪でも少なくなったハイテンションにならずにお酒が呑めるお店が1キロ以上（？）も並び、飾り気なしで「新潟の酒」を戴くことができました。「上越教育大学はいいところにあるなあ」と我が同僚…。

最後になりましたが、上越教育大学並びに学会関係者の皆様にもいろいろお世話になりましたことお礼申し上げます。ありがとうございました。

◇山崎俊英（新宿区立戸塚第一小学校）

私は、小学校の教員として国際理解教育の実践者という立場で、大会に参加させていただきました。今回の大会でも、大学での研究、学校現場での実践、地域での実践と自分が持つ視点とは違ったところから、国際理解教育を学びました。

自分なりに国際理解教育を捉え、実践する時「これでいいのだろうか。」という不安が付きまといまいます。学会でさまざまな立場の方の研究や実践報告を聞くとき、自分の国際理解教育の捉え方、実践について勇気付けられもします。しかし、それ以上に新たな視点を頂けることに喜びを感じます。

教育課程審議会の「中間まとめ」では、「総合的な学習の時間」での国際理解教育の位置づけが示されています。「総合的な学習の時間」が各学校の創意工夫を生かして実践される時間である以上、その理念についてもしっかりとっておかなければなりません。私は、「セルフエスティーム」を国際理解教育を進めていく概念になりうると考えていたのですが、その危険性を指摘されていた発表には、考えさせられるものがありました。また、実践事例の発表では、学習方法の多様性を学ばせて頂くとともに、自分がおかれている状況での実践へのヒントになりました。

一人一人の発表者、参加者から、国際理解教育への熱い思いが感じられ、新たな方向性が示された大会でした。さまざまな発表を聞きながら、国際理解教育は「人間の在り方」を問い、求める教育ではないかと感じました。

◇池田巨宏（千葉市教育センター）

「教育は人なり」という言葉がある。今大会を通じて、国際理解も、ひとえに「人」であるとの感を一層強くした。振り返ると、自由研究発表、課題別討論会、公開シンポジウムを貫いていたものは、人と人の営みや人に学ぶことであったように思われる。

さて、今大会の課題別討論会において、「国際理解教育の教育方法」に関する話題提供を行う機会を幸いにも得た。小さな実践研究であり、ミクロ的な視点ではあるが、実践に携わる者の立場として、国際理解教育の具体的な活動事例を示させていただいた。すなわち、教師が子どもたちのどのような力を育てようと思図し、そのためにどのような方法を用いて活動を行っているのかということである。これらの事例に対して、いわばマクロ的な面からもご意見をいただき、私自身、新しい視点が得られたように感じる。

最近、やや活字等からの間接情報中心に教育を考えることが増えたが、今大会に参加したことによって、ちょうど学校現場において子どもたちがそうであるように、相互の意見交換から多くの示唆が得られた。なお、議論の端々に「国際理解教育の概念規定が未だ明確になっていない」との発言が見られたが、私自身は、その擦り合わせの過程そのものが、「国際理解」の一場面なのだと感じている。

末筆になるが、実践者、研究者という見方を超えて、互いの人間性にまで及び、触れ合う場面を与えてくださった学会関係者並びに大会事務局の皆様方に深く感謝申し上げます。

◇宮地敏子（洗足学園短期大学）

理論的研究も実践報告も共に学びたい者としては、同じ時間帯に拝聴したい発表が重なり、選択に苦慮した。結局第1日目は自由研究発表の4分科会を渡り歩いてしまった。

保育者養成校に「国際理解教育と幼児期（仮称）」の講座新設を考えているので、いずれのご発表も大変示唆に富むものであった。「文章表現」「写真を読む」や「総合学習ワークブック・アジアを実感しよう！」などは高校大学中学でそれぞれ実践されている具体的な教材および方法であり、試行錯誤の過程まで報告があったのは後続のものにとっては有り難かった。

子どもの社会認識の発達についても参考になった。日頃、友情をテーマとした同じ絵本を3歳児クラスと5歳児クラスで読むと、反応が随分違うことを保育実践報告で実感しているので、適切な人権教育の可能性は幼児期にもあるように感じている。その意味で「セルフ・エスティームの考察」は、興味深かった。

また、特別部会の発表は『国際理解教育の理論的実践的指針の構築に関する総合的研究』に基づくものであった。学生たちが日本における国際理解教育の歩みを概観するとき、この一冊を元に十分な資料作りができるだろう。

日本国際理解教育学会では、例えば池田中学の国際理解教育構造図で示されるような蓄積された知見があるので、第2日目の課題別討論会でなされたように、参加者が共通理解に立って学習方法、教材開発、評価方法という「流れ」で活発な議論ができるのだと思った。

しかし、国際理解教育には家庭や感性も第一義に重要だと考え、また常に総合的に子どもを観、教科という発想がもちにくい幼児教育に身を置いているせいがこの「流れ」が急流に感じられた。確かに学校の授業で国際理解教育を実践していく上では議論の本流であろうが、今後、子どもの本来もっている人とかかわる喜びやものごとを知っていく喜びなどを耕す、源流である「感性をはぐくむ学習」（『学校における国際理解教育』多田孝志著に示唆されているような）研究発表をもっと聴くことができれば、ゆったりとした「流れ」になるにちがいない。充実した大会をありがとうございました。懇親会の銘酒リストは再訪の楽しみに保存しておきます。

理事会報告

◆平成10年度第1回理事会

日時：平成10年4月26日（13：30～17：30）

場所：渋谷 銀杏荘

出席者：天城、天野、新井、安藤、宇土、岡田、川端、佐藤、島、多田、中島、中西、樋口、米田、渡部（15名）

議事：

1. 報告事項

(1) 役員選挙結果

多田選挙管理委員長より第2回役員選挙の結果として選出された下記の2名が報告された。ただし、柿沼氏が辞退されたため、次点の星村平和氏が繰り上げ当選となったことが報告された。

天城勲、天野正治、新井郁男、安藤益代、宇土泰寛、大津和子、岡田真樹子、柿沼利昭、河内徳子、川端末人、佐藤郡衛、島久代、多田孝志、田淵五十生、千葉弘弘、永井滋郎、中島章夫、中西晃、樋口信也、米田伸次、渡部淳

(2) 平成9年度事業・会計報告

安藤事務局より別添の資料によって平成9年度の決算報告が行なわれた。若干の質疑応答の結果承認された。なお、東京近辺在住の理事に対して本年度の交通費を支給することになった。

平成9年度の事業報告として次の4つの報告が行われた。

- ①研修委員会—大阪にて研修会を実施した。
- ②研究委員会—科研の課題を中心に研究を行った。
- ③国際委員会—スタディツアーの実施と国際会議に向けての準備をした。
- ④紀要編集委員会—紀要第4集の編集を行った。

なお、事務局移転についての検討委員会を設け数回の会合をもった。

(3) 事務局移転について

天城会長より、目白学園女子短期大学内に事務局を置くことにした旨の報告があった。また、今後当事者となる中西理事より、これに関する若干の説明があった。

(4) その他

中西理事より、科研の報告書が完成し、学会員（96年度以後の会費納入者）に送付した旨の報告があった。400部程度の残部があるので、10年度大会で展示するほか、希望者に送料負担で配布することにした。

2. 審議事項

(1) 役員構成について

審議の結果、10年度から12年度までの3年間次の役員が決定した。

会長：天城勲

副会長：川端未人（主として研究担当）、中西晃（主として事務局担当）

常任理事：研究委員会—○新井郁男、宇土泰寛

研修委員会—○多田孝志、米田伸次

紀要編集委員会—○渡部淳、島久代

国際委員会—○千葉果弘、天野正治、安藤益代

（○印の理事は当委員会の委員長を示す。また、各委員会は必要に応じて数名の会員を加え委員会を構成するものとする。）

監事：桑ヶ谷森男、藤沢院

これに伴う規約改正を本年度大会に提案することになった。要点は以下のものである。

①第6条の「副会長を2名」にすること

②第9条の事務局を「目白学園女子短期大学」とすること

この他以下のことが決められた。

①各委員会の構成は、委員長が今後提案する。

②学会の将来ビジョンにつき川端、中島理事を中心として構想を練る。

③次の役員で執行部を構成して理事会にかけられる議案を整理する。天城、川端、中西、新井、多田、渡部、千葉

(2) 平成10年度事業計画・予算案について

1) 事業案

①大会を上越教育大学にて6月に開催する。

②紀要第4集を6月に刊行する。第5集の編集に取りかかる。

③研修会を実施する。（内容や名称は研修委員会で検討の上理事会で継続審議とする。）

④助成金が認可されれば国際会議を実施する。

⑤研究委員会では研究の方向性について検討する。

⑥将来ビジョン委員会では学会の将来構想について検討する。

⑦会員名簿を作成し、配布する。

2) 予算案 別添の予算案について審議し、一部の修正が加えられた。なお、次年度よりは会費を増額する必要があることが確認された。

(3) 国際会議の実施について

天野理事及び安藤理事より現況報告があり、それに基づいて討議が行われた。

現在までのところ会議成立に必要な助成金はかなり不足しており、助成関係の認可につきも不確実で、認可決定が8月末になることもある。申請書作成は行っていくとしても、年度内での延期を考慮しなければならないことも勘案された。

(4) 新入会員 次の3名が承認された。

正会員—馬場千枝子、西田弘次 学生会員—野崎志帆

(5) ERICの事業に対する後援を認めた。

第1回常任理事会議事録

日時：平成10年6月9日（火）午後5時から8時半まで

場所：目白学園女子短期大学

出席者：天城、天野、安藤、新井、宇土、川端、島、多田、千葉、渡部、中西、（事務局 土屋）

議事：

1. 平成10年度事業計画案審議

(1) 研究委員会よりの提案（宇土）

別添の資料により提案があり、審議の結果以下のことが了承された。

- ① 科研の報告書を研究検討していく。
- ② 特定課題プロジェクトを設定し、委員会より理事会に提案し、年次大会で特定課題研究として継続的に研究を進める。
- ③ 国際理解教育等の実践の動向を資料収集及び会員相互のネットワーク作り等を通して分析考察する。

(2) 研修委員会よりの提案（多田）

別添の資料により提案があり、審議の結果以下のことが了承された。

- ① 研修委員会の名称を実践研究委員会とする。
- ② 実際の活動は、地区別の研究会や研修会の開催に向けて、軌道にのるまで世話をしたり援助をしたりする。
- ③ 地区に開催を呼びかけるが、その内容は地域の特性にまかせる。
- ④ 本年度は島根県での開催が可能である。

(3) 紀要編集委員会よりの提案（渡部）

別添の資料により提案があり、以下のことが話し合われた。

- ① 自由投稿論文にはあまり大きな期待ができないのが現状であるので、依頼論文を数点用意しておく必要がある。
- ② 紀要編集委員の論文を掲載するのは好ましくないのでできる限り避ける。
- ③ 大会での課題研究やシンポジウムなどを編集する方向で考える。
- ④ 会員の自由投稿論文をなるべく採用する方向で考え、そのためにリライト原稿を掲載する方向で考える。
- ⑤ 島理事が編集委員の候補になっているが、本人の希望により研究委員会にまわることになった。その代わりに樋口理事が編集委員会に属することになった。

(4) 国際委員会よりの提案（千葉）

現在のところ助成金を得る可能性のあるところは、万博、公文、馬場財団で、国際交流基金および東京クラブは9月末に決まる。したがって、当初予定していた11月開催は不可能で、その代案として、会場確保が可能ならば経11年1月20日（水）から23日（土）までの開催とする旨話し合われた。

2. 規約改正について

添付の規約改正案を審議の結果、学生会員を大学院学生のみに限定するのではなく、学部学生や研究生まで含めるべきとの意見があり、「学生会員は、学生の身分を有する者とする。」と改正することにした。

3. 平成9年度決算報告及び平成10年度予算案審議

(1) 平成9年度決算は決算報告書の通り承認された。

- (2) 平成10年度予算案は会費未納者が多く、530名の会員で計上しているが、現実には50数万円の収支不足が見込まれる。各委員会の要求が多いが、収支のつじつまを合わせるための作成となっていること、事務所移転に伴う予算が相当見込まれるので赤字が予想される。このため11年度会費は次のように値上げすることが了承された。

入会金 3,000円（2,000円より）

正会費 8,000円（5,000円より）

学生会費 5,000円（3,000円より）

団体会費 30,000円（据え置き）

- (3) 長期にわたる会費未納者は退会扱いとすることが決められた。すでに退会届を出しているものもいるが、87名を退会扱いとした。また、平成8年度と9年度の2年間の会費未納者は18名、9年度会費未納者は72名おり、現在督促状を出しているところであることが報告された。

4. 次の新入会員が承認された。

正会員 大前敦巳（上越教育大学）、後藤裕史（草加市教育委員会）、阿久沢麻理子（姫路工業大学）、磯田三津子（東京学芸大学大学院生）、矢野正康（幕張南小学校）、田川寿一（広島市天満小学校） 6名

学生会員 乾美紀（神戸大学大学院生）1名

5. 会長推薦理事として下記の3名が推薦され、承諾をとることにした。

中村幸士郎（山口大学）、光田明正（桜美林大学）、二宮皓（広島大学）

6. その他

- (1) かねてから後援依頼のあった次の団体に対して後援を認めることとした。

- ① 開発教育研究協議会主催「第16回開発教育全国研究集会」
期日：1998年8月7日～9日
会場：神奈川県立地球市民かながわプラザ
- ② 地球市民教育センター主催「参加型学習案・実践事例集」
期日：1998年7月～1999年3月
場所：とよなか国際交流センター
- (2) 日本教育新聞主催の「'98教育総合展」に国際理解教育学会のコーナーを設置してもらい、紀要、報告書を展示販売することとした。
期日：1998年8月4日(火)～6日(木)
会場：東京江東区 東京ビッグサイト西1ホール
- (3) 平成11年度の年次大会開催校は帝京大学を予定している。大会実行委員長は星 村平和理事の予定であることが報告された。

◆平成10年度第2回理事会

日時：平成10年6月12日(金) 午後4時30分～7時

場所：上越教育大学人文棟学校教育系会議室

出席者：天城、川端、天野、新井、安藤、宇土、島、多田、田淵、千葉、永井、星村、米田、渡部、中西、(事務局 土屋)

1. 議事：6月12日付けの下記「第二回理事会議題」にも基づき議事を進めた。

報告事項

- (1) 第8回大会準備状況について新井郁男大会準備委員長より報告があった。
- (2) 多田孝志理事より今期の役員及び委員会構成について資料をもとに報告があり、次の追加・訂正があった。
 - ・常任理事に安藤益代氏を追加訂正し、同氏は国際委員会を分担する。
 - ・宇土泰寛氏は紀要編集委員を兼務し、常任理事とする。
 - ・嶺井明子氏は会長推薦理事とし、紀要編集委員会とする。
 - ・星村平和氏は明年度大会準備委員長であるので、常任理事とし、実践研究委員とする。
 - ・委員会一覧表にビジョン検討委員会を追加し、委員長に川端末人氏、委員は中島章夫氏、米田伸次氏、渡部淳氏、多田孝志氏とする。
- (3) 新事務局を目白学園女子短期大学内に置くことが承認された。

審議事項

- (1) 安藤益代理事より、平成9年度事業報告及び決算報告があり承認された。
- (2) 平成10年度事業案が各委員長から、資料により説明され承認された。
- (3) 平成10年度の予算案を審議した。次の点を修正した上総会に提案することになった。
 - ・入会者50名予定を100名とし、各理事はその目標を達成するように努力する。
 - ・研究委員会の予算2万円を12万円とする。
- (4) 規約改正及び11年度よりの会費増額について次のようにして総会に提案することとした。
 - ・規約改正は原案通り承認された。
 - ・11年度より、入会金は3,000円、正会員の会費は8,000円とすることが承認された。
- (5) 総会の次第に、11年度よりの会費値上げを提案することを追加した。
- (6) 5年間にわたる会費滞納会員が87名いることが報告され、通知の上退会扱いとすることになった。このほか平成8年度及び9年度の会費未納者が90名ほどいるので督促状を出していることが報告された。この結果現在の会員数は465名である。
- (7) 平成11年度の第9回大会は、帝京大学で開催される予定で、星村実行委員長より挨拶があった。

平成10年度総会報告

日時：平成10年6月13日(土)

場所：上越教育大学 出席者数：56名

一、会長挨拶 天城勲会長より開会の挨拶

一、第8回大会実行委員会の新井郁男実行委員長より歓迎の言葉があった。

一、新役員紹介 資料により昨年度末に選出された新役員及び幹事が紹介され、承認された。

一、議長団の選出 議長に宮地敏子会員(洗足学園短期大学)、副議長に千葉充会員(都立明正国際高等学校)、書記に市川博美会員(信州大学大学院)が選出され、議事に入った。

1. 議事

- (1) 平成9年度事業報告 総務担当の中西晃理事より資料により事業報告があった。
- (2) 平成9年度会計決算報告 中西晃理事より決算報告があった。
- (3) 平成9年度会計監査報告 樋口信也監事並びに桑ヶ谷森男監事が校務により欠席したため、監査結果が中西理事より代読された。会費徴収率を高めることによって事務局運営費に充足することが付加され承認された。このあと、事業報告及び決算報告が賛成多数で承認された。

- (4) 平成10年度事業計画案審議
- ① 学会紀要の刊行及び編集方針について渡部淳編集委員長より提案があった。
 - ② 研究委員会より国際理解教育の研究を、科研の成果を踏まえて深めること、特定課題研究プロジェクトチームを発足させて推進すること、実践の動向を資料を通して分析考察することが宇土泰寛委員より提案があった。
 - ③ 本年度からは実践研究委員会を発足させ、地域の教育実践研究を推進することと、本年度は島根県での開催を予定していることが多田孝志委員長より提案があった。
 - ④ 国際委員会の千葉果弘委員長より、アジア太平洋地域国際会議を平成11年1月20日から23日まで開催する予定で計画している旨の提案があった。
 - ⑤ 2回のニューズレター及び会員名簿を発行する旨の報告があった。
 - ⑥ ビジョン検討委員会を作り、学会の将来構想を考えていく提案があった。
- (5) 平成10年度予算案審議
中西理事より資料により学会予算案の説明と提案があった。この後平成10年度事業案と予算案の審議に入り、賛成多数で承認された。
- (6) 規約改正案審議
「副会長を2名」、「学生会員は、学生の身分を有する者とする。」、「本会の事務局を目白学園女子短期大学に置く。」の3点の改正案が提示され、審議の上可決された。
- (7) 年会費値上げについて
平成11年度より、入会金2,000円を3,000円にする、正会員の会費5,000円を8,000円にする改正案が提案され、審議の上可決された。なお、学正会員及び団体会員の年会費は据え置くことが決まった。
- (8) 第9回年次大会開催予定の件
平成11年度の大会は、平成11年6月12、13日の両日、東京八王子の帝京大学で開催予定であるが、実行委員長の星村平和理事より挨拶があった。

平成9年度決算報告と平成10年度事業案および予算案

◆平成9年度の決算報告（平成9年4月1日～平成10年3月31日）

収入総額 ¥5,646,648 支出総額 ¥4,555,679 次年度繰越金 ¥1,090,969

I. 収入の部

科 目	9年度予算額 (¥)	決算額 (¥)	差額 (¥)	備 考
入会金	80,000	106,000	26,000	53人分
年会費	2,500,000	2,155,000	△ 345,000	97年度338人分+他年度会費
助成金	2,000,000	2,000,000	0	公文国際奨学財団より
雑収入	80,000	34,173	△ 45,827	紀要販売他
繰越金	1351,475	1,351,475	0	
総 計	6,011,476	5,646,648	△ 364,827	

II. 支出の部

1. 事業費	2,650,000	2,256,424	393,576	
大会運営費	500,000	500,000	0	10年度大会運営費
研修会補助費	400,000	127,400	272,600	
紀要刊行費	1,000,000	1,155,000	△ 155,000	第3集刊行費
紀要編集費	400,000	325,285	74,715	第4集編集費
国際交流費	150,000	84,939	65,061	
ニューズレター刊行費	200,000	63,800	136,200	第11、12号発行費
会員名簿刊行費	0	0	0	名簿追加分印刷にて代替
2. 管理費	2,650,000	2,299,255	350,745	
人件費	500,000	421,705	78,295	アルバイト手当て
事務局運営費	700,000	700,000	0	電話・コピー等を含む
通信費	600,000	457,393	142,607	郵送費
設備・備品費	200,000	0	200,000	
消耗品費	100,000	154,416	△ 54,416	文具、事務用品
会議費	50,000	193,054	△ 143,054	会議室借料等
旅費交通費	300,000	213,390	86,610	理事会交通費
役員選挙費	100,000	149,399	△49,399	
雑費	100,000	9,898	90,102	振り込み手数料など
3. 予備費	200,000	0	200,000	
総 計	5,500,000	4,555,679	944,321	

◆平成10年度の委員会活動

平成10年度は、役員の変更を期に事業内容を充実し、学会として社会並びに会員の期待に添うよう活動計画を打ち出し5委員会を構成した。委員会の構成は①紀要編集委員会、②実践研究委員会、③研究委員会、④国際委員会、⑤ビジョン検討委員会である。その活動内容についてとその構成は別記の通り（新役員紹介参照）あるが、従来以上の活発な活動が期待できる。

◆平成10年度の予算案

I. 収入の部

科目	予算額	前年度予算額	増減	備考
入会金	200,000	80,000	120,000	2,000×100名
年会費	2,650,000	2,500,000	150,000	5,000×530名
助成金	2,000,000	2,000,000	0	公文国際奨学財団より
雑収入	300,000	80,000	220,000	紀要・報告書販売他
当期収入合計(A)	5,150,000	4,660,000	390,000	
前期繰越収支差額	1,090,969	1,351,475	△ 260,506	
収入合計(B)	6,240,969	6,011,475	229,494	

II. 支出の部

科目	予算額	前年度予算額	増減	備考
1. 事業費	3,240,000	2,650,000	590,000	
大会運営費	500,000	500,000	0	11年度大会用
紀要刊行費	1,200,000	1,000,000	200,000	4号刊行費
ニューズレター刊行費	200,000	200,000	0	13,14号発行
会員名簿刊行費	200,000	0	200,000	5号編集費
紀要編集委員会費	400,000	400,000	0	
実践研究委員会費	400,000	400,000	0	
研究委員会費	120,000	0	120,000	
国際委員会費	200,000	150,000	50,000	
ビジョン検討委員会費	20,000	0	20,000	
2. 管理費	2,850,000	2,650,000	200,000	
人件費	800,000	500,000	300,000	アルバイト費
事務局運営費	600,000	700,000	△ 100,000	電話・コピー
通信費	500,000	600,000	△ 100,000	
設備・備品費	400,000	200,000	200,000	パソコン購入
消耗品費	200,000	100,000	100,000	
会議費	50,000	50,000	0	
旅費交通費	200,000	300,000	△ 00,000	
雑費	20,000	100,000	△ 80,000	
事務局移転費	80,000	0	80,000	
役員選挙費	0	100,000	△ 100,000	
3. 予備費	150,969	200,000	△ 50,000	
当期支出合計(C)	6,140,969	5,500,000	640,969	
当期支出差額(A)-(C)	△1,090,969	△840,000	250,969	
次期繰越収支差額(B)-(C)	0	511,475	△ 511,475	

寄贈文献・図書

次の図書・文献の寄贈があった。

- ☆開発教育推進セミナー編 『新しい開発教育のすすめ方ー地球市民を育てる現場からー』、古今書院
- ☆渡部淳・多田孝志監修 『日本を見る目 世界を見る目ー国際理解の本ー』、岩崎書店
- ☆藤原幸章編 『外国人労働者問題と多文化教育ー多民族共住時代の教育課題』、明石書店
- ☆小林哲也・米田伸次監修 『国際理解教育論選集Ⅱー社会教育・学校外教育篇』、創友社
- ☆野口昇著 『パリ 四季と生活ー飛騨びととユネスコとー』、高山市民時報社
- ☆藤原幸章著 『外国人労働者問題をどう教えるかーグローバル時代の国際理解教育ー』、明石書店
- ☆米田伸次・大津和子・田淵五十生・藤原幸章・田中義信 『テキスト国際理解』、国土社
- ☆ディヴィット・ヒックス、ミリアム・スタイナー編：岩崎裕保監訳 『地球市民教育のすすめかたーワールド・スタディーズ・ワーク・ブック』、明石書店
- ☆帝塚山学院大学国際理解研究所 『国際理解』28号、帝塚山学院大学国際理解研究所

- ☆帝塚山学院大学国際理解研究所 『国際理解』29号、帝塚山学院大学国際理解研究所
- ☆中央教育研究所 『国際理解教育の実践的展開—教材の共有化をめざして—』、中央教育研究所
- ☆港ユネスコ協会 『港ユネスコ協会創立15周年記念誌』、港ユネスコ協会
- ☆伊藤忠記念財団調査研究報告書 『地域における国際理解教育の推進に関する実証的研究』、伊藤忠記念財団
- ☆筑波大学比較・国際教育学研究室 『比較・国際教育』第6号、筑波大学比較・国際教育学研究室
- ☆千里国際学園・睦学園 『第三回日韓(韓日)教育国際会議報告書』、千里国際学園・睦学園
- ☆南郷村立南郷中学校 『平成8年度 研究紀要』、南郷村立南郷中学校
- ☆南郷村立南郷中学校 『平成8年度 校内研究の概要』、南郷村立南郷中学校
- ☆天野正治・市川博・川野辺敏・桑原敏明・園一彦・中島章夫・中西晃監修 『国際理解教育と教育実践』全23巻、エムティ出版

お知らせ

◆入会会員のお知らせ

以下の12名の方が平成10年4月から6月の間に入会しました。

正会員	馬場千恵子(国際理解教育センター)	西田弘次(千葉大学)	大前敦巳(上越教育大学)
	後藤裕史(埼玉県草加市教育委員会)	阿久沢麻理子(姫路工業大学)	磯田三津子(東京学芸大学大学院)
	矢野正康(千葉市立幕張南小学校)	田川寿一(広島市立天満小学校)	高橋賢一(桜美林高等学校)
	古川治(大阪府箕面市教育センター)		
学生会員	野崎志帆(大阪大学人間科学部研究科大学院)	乾美紀(神戸大学国際協力研究科大学院)	

この結果現在の会員数は459名です。

◆規約改定

平成10年度の総会において、学会規約の一部が改正、新しく発行する会員名簿にも掲載します。改正点は、次の3項です。

(下線部は改正点)

第4条(会員)

(2) 学生会員は、学生の身分を有する者とする。

第6条(役員) 副会長 2名

第9条(事務局) 本会は、事務局を目白学園女子短期大学に置く。

◆平成11年度より会費値上げ

平成10年度の総会において、平成11年度より次のように会費の値上げが承認されました。なお、学生会員及び団体会員は据え置きです。

正会員 8,000円

入会金 3,000円

既に平成11年度以降の会費を納入されている会員は、来年度に差額3,000円を納入してください。

◆科学研究費による刊行物のお知らせ

平成7年度から9年度にかけて文部省科学研究費の助成を受けて研究を進めてきた『国際理解教育の理論的、実践的指針の構築に関する総合的研究』の報告書が完成し、会員に配布しました。また、多少の残部がありますから、ご必要な方は郵送料実費でお届けしますので、学会事務局までお申し出ください。なお、報告書に次の個所に訂正がありますのでご訂正ください。

	誤	正
p.68	タイトル 事業に対するへの取り組み	事業に対する取り組み
p.70	3行目 5	(2)
p.70	6行目 ②	①
p.77.	2行目 確かには	確かに
p.78	16行目 すでにすでに	すでに
p.80	24行目 (⑧—5~6頁)。	(⑧—5~6頁)と述べていた。
p.86	16行目 1960年第	1960年代

◆日本教育新聞社主催の展示会への出品

日本教育新聞社主催の「'98教育総合展」に国際理解教育学会のコーナーが設けられ、本学会の活動内容等を展示し紹介することになりました。期日場所などは次の通りです。

期日：平成10年8月4日（火）、5日（水）、6日（木）の3日間

会場：東京江東区有明 東京ビッグサイド西1ホール

◆会員の図書・文献寄贈のお願い

会員の皆様関わった文献・図書・報告書・教材などがありましたら、学会にご寄贈ください。最近そのような資料を求める方が増えております。学会の宣伝にもなりますのでお願いします。また、ニューズレターなどで会員にもお知らせしたいと思います。その際、助成金をいただいている公文国際奨学財団にも送りたいので、できたら2部をお送りください。

◆公文国際奨学財団よりの助成金

毎年助成を受けております公文国際奨学財団より、本年度も200万円の研究助成金をいただきました。この助成金は紀要刊行等、学会活動において重要な役割を果たしております。この誌上を借りて厚く御礼申し上げます。

◆会員名簿刊行のお知らせ

新しい会員名簿ができあがりました。新会員名簿には、氏名、所属、連絡先、電話番号、ファックス番号、E-mailを掲載しました。訂正箇所がありましたら、ファックスでご連絡ください。所属や連絡先が今後変更された場合は、事務局までご一報ください。

(連絡先 03-5983-8132)

事務局移転と会費納入のお願い

◆事務局の移転

日本国際理解教育学会事務局は、平成9年度までは日本国際交流振興会にありましたが、平成10年度より下記に移転しましたので、新住所及び電話番号・FAX番号をお知らせします。

〒161-8539 東京都新宿区中落合4-31-1

目白学園女子短期大学内 日本国際理解教育学会事務局（担当：中西 晃、土屋洋子）

電話・FAX番号 03-5983-8132

事務局への電話連絡は中西または土屋がでるようになっておりますが、不在のときは留守電に用件と連絡先を入れておいてください。後程ご連絡いたします。また、会員が資料等をご利用できるようにいたしてありますので、どうぞご遠慮なくご利用ください。これにともない、会費等の納入先も次のように変更になりました。

・郵便振り込み 口座番号 00120-5-601555（従来とおり）
加入者名 日本国際理解教育学会

・銀行振り込み 富士銀行 中井支店（249） 普通預金
口座番号 1783886
名義人 日本国際理解教育学会

◆年会費納入のお知らせ

当学会の活動のすべたは会員の皆様の会費でまかなわれております。会費納入状況は必ずしも高くないので、学会の活動に支障が生じております。なにとその事情をご賢察の上、年会費未納の会員は早急に会費をお支払いくださるよう宜しくお願いいたします。

会費は正会員：5000円、 学生会員：3000円、 団体会員：30,000円です。